

2017年10月4日

原子力規制委員会 様

原発いらぬ福島の人たち

柏崎刈羽原発の再稼働を断じて許さない

福島から訴える。

私たちは福島第一原発事故による被害を受けた後も福島に居住せざるを得ない者、また放射能汚染された地を離れて他県に住むことを余儀なくされた者たちである。留まる者も、避難した者もどちらも、さまざまな困難の中を生きている。原発事故がなかったら、このように人生を狂わされることも、今後何世代にも渡って広範囲に放射能汚染とその被害が続いていくことはなかったはずである。

福島第一原発の事故を起こした当事者である東電に対し、規制委員会は「原発を運転する資格がある」と認定したが、言語道断のことである。なぜこれを認めたのか。福島第一原発の事故はいまだ収束できず、被災者への賠償もまったくもって不十分のままである。規制委員会は何をそんなに急ぐのか。

規制委員会が今やるべきことは、まず、福島第一原発事故を徹底的に検証し、より厳しい視点と未来を見据える倫理を持ちながら、新しい具体的な対策で柏崎刈羽の安全性を審査することのはずである。「新基準を満たした原発では、事故は一定程度で収束する」との甘い仮定を導き出すための規制委員会なら、「ない方がマシ」と多くの市民が思うのは当然至極のことである。

6年半前のあの事故の甚大さは、子どもの甲状腺ガンを始めとする、増え続ける様々な健康被害を見るだけでも明らかだ。事故前までは、放射性廃棄物として厳重管理しなければいけない基準値（100ベクレル/kg以上）が、今や一般食品はそこまでは安全とされている。かつては父母が代々の田畑を耕し、豊かな自然の恵みを受け、子どもたちが無邪気に走り回っていた場所に今や黒いフレコンバッグが山のように積まれ、その袋からは雑草が生い茂っている。故郷のこの光景を見るたびに絶望感におそわれる。こんなところに子どもたちを帰して良いわけがない。避難者の住宅の無償提供の打ち切りなど、除染し帰還させ、原発事故による放射能汚染の実相と被害を過小評価し、安全キャンペーンが大々的に展開されている。

原発事故によって被害を受け苦悩する人々の声に耳を貸さず、原発事故がなかったかのようにして推進されている原発再稼働方針に、私たちは満腔の憤りを持って抗議する。

東電に柏崎刈羽原発を運転する資格はない。

柏崎刈羽原発の再稼働を認めてはならない。